
病んだ彼女と不運な幽霊

M T L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病んだ彼女と不運な幽霊

【Nコード】

N3835P

【作者名】

MTL

【あらすじ】

幽霊の食料は人間の恐怖心とされている
幽霊界で、そこそこの実力を誇る田中は、人間の恐怖心を狩りに人間界へ行った
そこで合ってしまった女の子は、少し病んでいた

女の子と幽霊（前書き）

不定期更新です

女の子と幽霊

「はぁ…」

幽霊バーでため息をつく1人の幽霊、田中

「おいおい！どうしたんだ？」

「…おお、佐藤じゃないか」

「幽霊界で、かなりの実力を誇るお前が、バーでため息なんて…、何かあったのか？」

「聞いてくれよ」

「おお！お前の愚痴ぐらい聞いてやるよ！そう言う仲じゃないか」

「俺、人間界に行ったんだ」

「恐怖心は狩れたか？」

「狩れたさ！十分にな…」

「で？何が有ったんだ？」

「魂を狩った後の話だ…」

少し前の人間界

ガタンガタン…

列車が行く駅のホームに田中は居た

「いよおーし！今日は大量だ！！」

「帰って、宴会の準備でもしようかな…？」

ご機嫌の田中

「…母が家を出て、父はパチンコにキャバクラ漬け…、毎日のように借金取りから逃げ回る日々…」

「ん？女の子…だな」

「こんな命だもん、死んだって良いよね」

「何を言ってるんだ？」

「誰も…、悲しまないから」

線路に飛び込む女の子

「うおおおい!?!」

ガタンガタン!?!

線路に落ちた女の子に向かって、列車が直進してくる

「…さよなら、私の人生」

目を瞑る女の子

「キヤアアアアア!?!」

「おい! 危ない!?!」

悲鳴が響き渡るホーム

「待てえええええ!?!」

女の子をすくい上げる田中

「おい! 女の子が浮いたぞ!?!」

「どうなってるの!?!」

ホームに居た人達がざわつき出す

「やっちまった…」

現在の幽霊バー

「…お前、幽霊が人間を助けるのは幽霊憲法に違反するぞ」

「そうなんだよなあ…、何で、助けちゃったんだろ」

「ま、お前がその女の子を見捨てるようなら、俺は縁を切ってるぜ」

「お前って、粹な奴だなあ…」

ため息をつく幽霊

「で、どうしたんだ? その後」

「助けた女の子を廃墟のビルまでは運んだ」

「人には見られてないだろうな?」

「勿論だ! だが、その後が問題だったんだよなあ…」

少し前の廃墟のビル

「…ここは?」

目を覚ます女の子

(気が付いたみたいだな)

「私…、線路に飛び込んで…」

(じゃあ、俺は帰るか…)

「ねえ、ここは何処かしら？」

「!？」

幽霊を呼び止める女の子

「俺が見えてるのか？」

「何、言ってるの？よく見えてるわよ」

「うわ…、最悪だ」

現在の幽霊バー

「人間は、精神が極限状態になると靈感が目覚めやすいからな」

「線路に飛び込んだとき、死を覚悟して精神が極限状態になったんだよ」

「…死ぬはずの魂が救われて、見えないはずの幽霊が見えたって事は、その女の子は、もう人間界には居られないぜ？どう対処したんだ？」

「…俺って、馬鹿だよなあ」

「？」

「まあ、ここからは俺の話を聞いてくれ」

女の子と幽霊（後書き）

読んでいただきありがとうございました

ゲームセンター

少し前の人間界

「：アナタ、誰？」

「え！？俺！？」

「アナタ以外に誰が居るのよ」

「俺はね…、えっと…」

言葉に詰まる田中

（どう誤魔化せば良いんだ！？「幽霊です」なんて、言えるわけもないし…）

「あ！思い出した！！」

ぽんと手を叩く女の子

「アナタ、私を駅のホームで助けてくれた人でしょ？」

「え！？あ、いや…」

「そうでしょ？」

「：はい、そうです」

「やっぱり！って、事は…」

「？」

「白馬の王子様ね！！」

現在の幽霊バー

「最近の子って、おとぎ話を信じてるんだな」

「良いじゃないか！夢があって」

「いや、何歳かは解らなかったんだけど…、たぶん高校生くらいかな」

「夢を見続ける女の子って良いな」

「お前、そう言うのタイプだっけ？」

「いや、年上でキツイのがタイプだな」

「：そうか」

「で、どうなったんだ？」
「それが…」

少し前の廃墟のビル

「私の人生も捨てた物じゃないわね！白馬の王子様に会えるなんて…」

「えっと…、あの…」

「何！？白馬の王子様！！」

「俺、白馬の王子様じゃ…」

「あ！ゴメンなさい！名前で呼んだ方が良いわね！！」

「え…」

「名前は！？」

「…田中です」

「田中さん！良い名前ね！！私は咲紀って言うの！！」

「「咲紀」…」

「さあ！田中さん！行きましょ！！」

「え？何処に？」

「父の所！結婚の挨拶に！！」

「いやいや！結婚はしないから！！」

「え？どうして？」

「「どうして」って…、俺は君を助けただけだし…」

「それで、こんな所に連れてきたんでしょ？」

「まあ、連れてきたけど…」

「で、したんでしょ？」

「何を？」

「決まってるでしょ？気絶した可愛い女の子にする事と言えば！！」

「わー！ストップ！ストップ！！」

咲紀の言葉を遮る田中

「何？言葉にするの、恥ずかしい？」

「してないから！第一、俺は…」

「「第一」何？」

（幽霊…って、言わない方が良いな）

「その…、えっと…、覚悟できてないし、互いのこともよく知らないし…ね？」

「じゃあ！知りましょ！！！」

「え？」

現在の幽霊バー

「で？どうしたんだ？」

「…ゲーセン」

「はあ？」

「ゲーセンに行くことになった」

「ゲームセンターか？お前、他から姿が見えないんだろ？」

「ああ、見えない」

「そしたら、その咲紀ちゃんは1人で喋ってるようにしか見えないわけだ」

「そうなるな」

「変人か、病んでるようになしか見えないぞ」

「…いや、そう見えなかったよ」

「どうして？」

「実体化…したんだ、俺」

「マジで！？どうやってだ！？」

「ゲーセンって、電波が多いだろ？俺達、幽霊に有害な電波が俺の体に干渉して…」

「実体化した…、か？確かに、ポルターガイストとか心霊写真とかの原因はそれだな…」

「そうだよ！つくづく不幸な幽霊だよ…、俺って」

「…お疲れ」

「その後は大変だった…」

少し前のゲームセンタ―

「次！アレやりましょ！！」

「もう、数え切れないぐらいやったよ…」
ため息をつく田中

「大丈夫！私のお薦めだから！！」

「どんなの？」

咲紀が入ろうとしているゲームは、ゾンビを倒すゲームである
(こんなゲームも有るのか)

「早く！やりましょ！！」

「あ、ああ…」

渋々、ゲームに参加する田中

「それじゃ！やりましょ！！」

テエウン、テエウン…

「うゝうゝああうゝああ…」

迫った来るゾンビ達

(ん？幽霊界の西洋人に似てるな…)

「えい！えい！！」

ドン！ドン！！

「ぎいやああああ…」

敵を銃で撃っていく咲紀

(西洋人――――！！)

「何してるの！？早く、撃って！！」

「え！？え！？」

「早く！こうやるの！！」

田中の銃を掴む咲紀

「引き金を引いて！！」

「は、はい！！」

ドン！ドン！！

「ぎやああああああ…」

「その調子！！」

「え!?! コレで良いの!?!」

「うん! ばんばん撃っちゃって!?!」

「西洋人を!?!」

「何、言ってるの!?! 早く! 撃って!?!」

「う、うおおおお!?!」

数分後:

「やった! ハイスコア!?!」

「...」

押し黙る田中

現在の幽霊バー

「あの時の罪悪感と恐怖心は忘れないよ...」

「お前も、苦勞したんだな」

「あの後も恐ろしかった」

「何が?」

「「オバケ屋敷」って言うんだけど...」

「?」

「これは、俺が幽霊になってから、最も恐ろしい出来事だった...」

ゲームセンター（後書き）

読んでいただきありがとうございます

オバケ屋敷

少し前のオバケ屋敷

「何？ここ」

「知らないの？オバケ屋敷よ」

「オバケ屋敷…」

「結構、怖いことで有名なの！楽しみね！！」

（オバケって…、俺達のことか？）

「いらっしやいませ！！」

受付が2人を案内する

「では、このライトを持って、ゴールを目指してください」

「はい！」

「は、はい…」

現在の幽霊バー

「で？どうだった？」

「全然、怖くなかったよ」

「まあ、そりゃそうだろうな！」

「だって、毎日、見てるもんな」

「鏡見て、悲鳴挙げる奴は居ねえよな」

「うん、そこまでは良かったんだよ」

「「そこまでは」？」

少し前のオバケ屋敷

「凄いいね！田中さん！！」

「何が？」

「あんなに怖いのに、悲鳴の1つもあげないんだもん！！」

「まあ、毎日、見てるから…」

「あ！オバケ屋敷通だったの？」

「そう言うわけじゃないんだけど…」
「？」

（どう言えば…）

その時、田中の視線の先には、一組のカップルが居た
「ちよっと！このメール、何よ！？」

「そ、それは…」

（何だ？ケンカ？）

「どういう事か、説明してくれる！？」

「お、俺！トイレに行ってくる！！」

「あ！待ちなさい！！」

トイレに逃げていく男

「…」

「どうしたの？田中さん」

「ト、トイレに行ってくるから」

「うん！待ってるね」

ダダダダ…

トイレに走っていく田中

少し前のトイレ

（どうにか、逃げ切れたな…）

安堵のため息をつく田中

（このまま、逃げてしまおうか？）

「はあ…」

田中の隣に、暗いため息をつく男が居る

（あ！先刻の…）

「…退いて貰っていいですか？」

「あ、すいません」

男に道を空ける田中

グー

田中の腹が鳴る

（そういえば、腹が減ったな、袋は駅で捨ててしまったし…）
腹をさする田中

「はぁ…」

トイレのベンチでため息をつく男

（そうだ！この男から、恐怖心を取るか！！）

「ああ、何で、こんな事に…」

「ちよっと、その人」

「はい？何ですか？」

ズウウウウ…

田中の背中から、恐ろしい魔物が現れる

（さて、コレで恐怖心が…）

「…オバケ屋敷の面接でもしに来たんですか？」

「え？怖くないですか？」

「怖いも何も…、今は彼女の方が怖いですよ」

「…何が有ったんですか？」

「俺の愚痴、聞いてくれます？」

「ええ、構いませんよ」

微笑む田中

（俺より怖い物って、どんな物だろうか？）

「彼女にプレゼントをあげようと思って、友人にプレゼント選びを頼んだんです」

うつむく男

「「プレゼントが選り終わった」って、友人からメールが来たんですけど…」

「彼女さんが勘違いしてしまったんですか？」

「そうなんです！サプライズで出したいから、ネタ晴らしも出来ないし…」

「うーん、難しいですね」

「そうなんですよ…」

「…そうだ！友人さんと、一気にネタばらしをしたらどうです？」

「それじゃ、意味が…」

「まあ、聞いてください」

ゴニョゴニョと男にささやく田中

「な、なるほど!!」

「ね? 名案でしょう?」

「流石です! で、その計画は…」

「無論、俺も手伝います」

「頑張りますよう!」

「はい!!」

現在の幽霊バー

「で? それの何処が「最も恐ろしい出来事」なんだ?」

「問題は、この後だ」

頭を抑える田中

「まさか…、人間界に、あんな恐ろしい技術が有ったなんて…」

「「恐ろしい技術」?」

オバケ屋敷（後書き）

読んでいただきありがとうございました

仲直り計画

少し前のオバケ屋敷

「うん！我ながら、良い計画だ」
にやける田中

「おい！アルバイト！交代、急げ！！」
「ウス！！」

奥の部屋から声がする

「ん？何だ？」

部屋を覗く田中

その部屋には、大量の幽霊の着ぐるみが置いてある

「あ、皆さんだ」

「早くしろ！！」

「ウス！！」

「挨拶ぐらいはした方が良いかな？」

部屋に入ろうとする田中

ガサッ

アルバイトの男が、幽霊の着ぐるみを持ち上げる

（ん？西洋人、ぐったりしてるな）

「この皮、厚いんだよなあ…」

文句を言いながら、着ぐるみを着るアルバイト

「な、なあ！？」

腰を抜かす田中

「あ、お疲れ様です」

「おう！次は頼んだぞ」

ゾンビの着ぐるみを、別の男が脱ぐ

「うわああああああああ！！」

その場から逃げ出す田中

「ん？誰か居たか？」

「いえ、見てませんけど…」
「そうか？なら、良いが…」

現在の幽霊バー

「に、人間は！幽霊の皮を剥いで着る技術を有しているんだよ…！」

「な、何だってえ！？」

「ああ、恐ろしい…」

ガタガタと震える田中

（…って言うか、それ、着ぐるみだろ）

「佐藤！どう思う！？」

「「どう思う」って…、まあ、恐ろしいことだな」

「だろう！？」

（面白いし、このまま放っておくか）

「ああ、恐ろしい…」

「で？その男と彼女は怎么样了んだ？」

「あ、ああ、そうだったな」

少し前の公園

「どうしたの？田中さん、こんな所に来て」

「実は、ある男の人の手伝いをする事になってね」

「どんな手伝いかは知らないけど、頑張ってるね…！」

「うん、ありがとう」

「私は、どうすれば良いの？」

「ここで待っててくれるかな？」

「解ったわ」

公園の物陰に隠れる田中と咲紀

「…こっちに来てくれないか？真美」

男が彼女を連れてくる

「公園？別れ話にはうってつけの場所ね」

「…よく聞いてくれ、真美」

「何かしら？」

「実は…」

「おい！そのカップル！！」

「え！？」

見るからにヤンキー姿の田中が物陰から出てくる

「良い姿、見せてくれんじゃねえか！！」

「ちょ、ちよつと！何よ！？」

「有り金、置いてけよ！！」

「な、何なんだ！？お前！！」

現在の幽霊バー

「これまた、ベタな…」

「名案だろ？」

「うん、最高のベタさだよ」

「そうか？俺が初めて人間界で視た「あにめーしょん」だったので、やってたぞ」

「アニメだからな」

「そう言う物なのか？」

「そう言う物だ」

ため息をつく佐藤

「で？それから？」

「ああ、それから…」

少し前の公園

「おらおら！どうしたあ！？」

「…ちよつと、ヒロシ」

「何だよ？真美」

「アレ、渡しなさいよ！アナタの彼女のプレゼント！！」

「あ、アレは…」

（よし！食いついた！！）

少し笑う田中

田中の作戦では…

1、公園で、例のカップルを襲う

2、金目の物を要求

3、男が彼女へのプレゼントを差し出す

4、プレゼントを田中が受け取る

5、プレゼントを見て「おい！この指輪、名前が彫ってるんじゃない、売れないぜ！！」と言い、プレゼントを返す

6、田中は立ち去る

7、男と、その友人がネタ晴らし

8、男と彼女は仲直り！

と、言う計画である

「さあ！早く渡しやがれ！！」

「渡しなさいよ！！」

「お、おう…」

プレゼントを渡す男

「…酷い」

「え？」

男の彼女の頬を涙が伝う

仲直り計画（後書き）

読んでいただきありがとうございました

予想外

「アンタって、そう言う人間だったの!？」

「え? え?」

困惑する田中と男

「その彼女さん、自分へのプレゼントを易々と渡されて…! 可哀想じゃない!!」

「え、いや、コレは…」

「最っっ低!!」

パァーン!!

男の頬が彼女に強く叩かれる

「あ、あの! 実は、コレは…」

「アンタもよ! 人の物取り上げるなんて、どういう神経してるの!？」

「え…!？」

ゴッッ!!

田中の腹部に激しい蹴りが叩き込まれる

「おぐう…!!」

ドサッ…

その場に倒れ込む田中

「た、田中さん…!!」

物陰から出ようとする咲紀

(…いえ、ダメよ! 私!!)

踏みとどまり、頭を抱える

(白馬の王子様が、こんなミスをするはずがないわ!! 何か、続きが…)

「本当、最低よ! アンタ達!!」

その場を去る彼女

現在の幽霊バー

「…まさかの展開だな」

「ああ、予想外だったよ…」

「で、どうなったんだ？」

「…どうなったか、って？」

「ああ、そう聞いてるんだ」

「…放置中」

「あ？」

「その状態から、変化無しなんだよ…」

「どうして!？」

「その後すぐに、俺の実体化が解けちゃって…、男に俺の姿は見えなくなっちゃった」

「どうしたんだよ!？その後!！」

「咲紀ちゃんに「用事がある」って、幽霊界に帰ろうとしたら、コレを渡されて」

田中が携帯電話を取り出す

「お？携帯電話…」

「コレで「用事が終わったら、連絡して欲しい」って…」

「どうするんだよ？」

「…この際だから、もう一回、人間界に行く」

「あのカップルが気になるのか？」

「俺のせいで関係を悪化させたんだ!責任は取らなきゃ…」

「…解った!俺も協力してやる!！」

「ありがとうおー!佐藤!！」

「今の話、聞いてたら、放っとける気がしなくなったよ」
苦笑する佐藤

「当分暇だし、死ぬはずの人間を助けた友人を助けなけりゃいけないし」

「う…」

「まずは咲紀ちゃんに合流だな」

「その後、ゲームセンターに行くんだろ？」

「俺も実体化しなきゃいけないし…、な」

「その後は？」

「お前が関係性を悪化させたカップルの仲直りをさせる！それで、あとは咲紀ちゃんをどうするか…、だ」

「ああ、そうだな」

「さて、行くか」

席を立つ佐藤

「はい、コレ」

佐藤が田中に紙を渡す

「…何コレ？」

「425レイ」

「はい？」

「いや、会計」

「俺が払うの？」

「最近、金欠で…」

「…はあ、まあ、相談にも乗って貰ったし」

紙を受け取る田中

「ありがと！」

「じゃ、行こうぜ！仲直りをさせに！！」

「おう！！」

予想外（後書き）

読んでいただきありがとうございました

携帯電話

現在のゲームセンター

「おお、凄いな…」

辺りを見回す佐藤

「眼がチカチカするだろ？」

「おう、目が痛い」

「俺も痛い」

笑い合う2人

「で、どうだ？実体化した感想は」

「何か…、しっくり来ないな」

「だろ？」

「だが、動けるな」

「じゃあ、咲紀ちゃんに電話をかけるか」

カチャツ

電話を取り出す田中

「…」

そのまま、押し黙る

「どうしたんだ？早くしてくれ」

「どうやって、かけるんだっけ…？」

「はぁ！？知らないのか!？」

「…知らない」

「意味ないじゃん…」

「誰かに聞こうか？」

「そうしようぜ」

「すいませーん」

「はい？」

田中が、通りすがりの女性を呼び止める

「この携帯、どうやって使うんですか？」

「え…、知らないんですか？」

「お恥ずかしい話で…」

「今時、珍しいですね」

優しく笑う女性

「私、携帯会社に勤めてるんです」

「そうなんですか」

「よろしければ、来てくださいますか？ 使い方も教えますよ」

「ど、どうしよう？ 佐藤」

「行けばいいじゃないか！ 話が進まないからな」

「そうだな…」

「それじゃ、行きましょう」

現在の携帯電話ショップ

「ここは？」

「アナタが持つてるMTLと言う携帯会社のショップですよ」

「おい、田中」

「何だ？ 佐藤」

「ここ、もの凄い電波だぞ！！」

「それが？」

「ここまで凄いと、俺達に有害じゃないのか？」

「た、確かに…」

「どうしたんですか？」

「い、いえ、実は…」

「ちょっと！ 真希ちゃん！！」

店の中から、見るからにきつそうな女性が出てくる

「仕事サボって、何処に行ってるの！？」

「あ、店長…」

「あら？ お客様？」

「は、はい！ そうです」

「真希さん、店の中に行きましょう」

「え？」

真希の肩に優しく手を置く佐藤

「バラが、バラが俺を待っていますから」

「佐藤！？」

「俺の好みだ」

「気の強い年上…、あの人か！！」

「さあ！電波が何のその！！俺の愛は全てを凌駕する！！」

店の中に入っていく佐藤

「…変わった人ですね」

「そう思います？」

「はい…」

「俺も、そう思います」

ウィーン

店の自動ドアが開き、田中達を迎える

「お客様、携帯の使い方が解らないんですか？」

「は、はい…」

「でしたら、携帯を出してください」

「わ、解りました」

携帯を出す田中

「…！！」

真希が目を大きく見開く

「これって…！！店長！！」

「何なの？真希ちゃん」

「コレを見てください！！」

「もう！お客様の前で大声は…」

押し黙り、携帯を目視する店長

「…お客様をVIPルームにご案内しなさい！！」

「はい！！」

慌ただしく動き出す店内

「…どういう事だ？佐藤」

「俺が知るか」

「お客様！我が店の店員が失礼いたしました！！」

「はい？」

「VIPルームへご案内――！！」

ザザザザ！！

「レッドカーペット！？」

「何したんだ？田中」

「何もしてないよ！！」

「ささ！どうぞ、こちらへ！！」

「は、はい…」

現在のVIPルーム

「お客様！ワインでございます！！」

トクトク…

田中の持ったグラスにワインがつぎ込まれる

「…どういう事？マジで」

「あ！俺、聞いたことがあるぜ」

「何を？」

「優しく接する女性に夢中で、品物を頼みまくり、後で凄い金額を要求されるんだよ！！」

「悪徳商法じゃないか！！」

「そうだ！それが、この店なんだよ！！」

「何を仰いますやら、お客様」

「悪徳商法！？」

「いえいえ！アナ様方は、まさにVIP！！」

「ど、どうして…」

「その携帯は世界最高峰モデル、「ゴットズMTL」！！」

「「ゴットズMTL」？」

「この携帯を持つと言うことは、世界の携帯所持者の神に等しいのです！！」

「はい？」

「よって！VIP待遇は当たり前！！携帯界の神ですから！！」

「…何、言ってるんだ？この人」

「俺には解らないな」

「とりあえず、使い方を…」

「はい！お任せくださいませ！！」

パンパン！！

手を叩く店長

「真希ちゃん！お客様に、ご使用方法を！！」

「は、はい！！」

ぎこちなく歩いてくる真希

「よ、よろしくお願いいたします！お客様！！」

「…普通で良いよ」

「そ、その様な失礼なことは！！」

「いや、携帯を持ってるだけだから」

苦笑する田中

「俺のじゃないし」

「え！？そうなのでございますか！？」

「うん、預かってるだけなんだよ、彼女から」

「そうでございましたか…」

「しかあーし！！」

店長が横から出て行く

「彼女様であろうと彼氏様であろうと！神に違いはございません！
！VIP待遇は当たり前なのです！！」

「そ、その通りでございます！！」

それに賛同する真希

「…なあ、田中」

「…何だ？佐藤」

「人間界って、面白いな」

「お前もそう思う？」

「うん、そう思う」

大きくため息をつく2人であった

携帯電話（後書き）

読んでいただきありがとうございました

金持ち

「このボタンをですね…」

丁寧に見える真希

ガヤガヤ…

外が騒がしい

「どうしたんですか？外は」

「確かに騒がしいな」

「調べてきます!!」

全力で走っていく店員

「ただいま戻りました!!」

「早っ!!」

「何でも、少女が「田中さんが戻ってこない、見捨てられたんだ」と入水自殺をしようと…」

「咲紀ちゃんだ!!」

走っていく田中

「待て!田中!!」

「何だ!？佐藤!!」

「持って行け!!」

携帯を放り投げる佐藤

「ありがとう!!」

全力で店から出て行く田中

「佐藤様は行かなくても良いのですか？」

「うん、携帯の使い方を覚えなきゃ」

現在の海

「おい、やばくねえか？」

「誰か止めろよ」

「マジヤバー」

野次馬は咲紀を見ているだけで止めない

「田中さんが居なくなつて、4時間46分3秒…、見捨てられたんだわ、私」

「咲紀ちゃーん！！」

バシャバシャ！！

田中が咲紀に向かって走っていく

「田中さん！来てくれたの！？」

「ハア！ハア…！！」

息が切れている田中

「何で自殺しようとするの！？」

「田中さんに…、見捨てられたから…」

「見捨てたりしないよ！！」

「…私、勘違いしてたわ！！白馬の王子様が見捨てたりするはず無いじゃない！！」

「…白馬の王子様？」

「そうよ！その通り！！ああ！白馬の王子様！！」

「…とりあえず、陸に上がろうか」

現在の海岸

「またつく！自殺なんてしちゃダメだよ！！」

「ごめんなさい、白馬の王子様」

「この携帯、何処で手に入れたの？」

「…父から貰ったんです」

「お父さんから？」

「母が居なくなつてから、キャバクラ付けになった父に…」

「生活が苦しいんだね…」

「はい、もうメイドが2人も減りました」

「メイド！？」

「昔は300人いたのに…」

「…咲紀ちゃん、駅で言ってなかった？」

「何をですか？」

「借金取りから逃げ回る日々、って…」

「はい、毎日借金取りが来るんですよ」

ため息をつく咲紀

「私が払っても払っても、父が借金を作るんです…」

「どんな借金取りの人？」

「店の方々です」

「店？」

「高級クラブなどの…」

「高級クラブ？パチンコじゃなくて？」

「遊びをパチンコというのでは？」

「…店の人達は何て言ってくるの？」

「つけを払え、が口癖です」

「つけ！？」

「もう借金を払うのに疲れました…」

「お金は？」

「腐るほど有るのに、父が銀行に行くのと金庫を開けるのが面倒臭いと言っんです」

「！？」

「だからと言って、メイドや執事に触らせるわけにも行きませんし…」

「つまり、咲紀ちゃんのお母さんは…」

「そんな父に愛想を尽かし、別居中です」

「…うん、解った」

「何がですか？」

「咲紀ちゃんが金持ちって事ぐらいが」

「そんな事ありません！国家予算の数倍程度しか所持してません！
！」

「それを金持ちと言っんだよ…」
大きくため息をつく田中

金持ち（後書き）

読んでいただきありがとうございました

ピンチ

現在の公園

「とりあえず、服を乾かそうか」

服を乾かす田中

「そう言えば、あのカップルはどうなったのでしょうか？」

「咲紀ちゃん、知らない？」

「田中さんが帰った後、言い争って別れたところまでは見ました」
(マズイ事になったな…)

「あの方では？」

「え!？」

公園のベンチに死んだような目をして座っている男

「うわ…」

「酷いですね…、今にも自殺しそうな状況ですよ」

「コレも俺の責任…! どうかして、関係性を戻さないと…」

「おい、兄ちゃん」

「!!」

極道の男がベンチで死んだ目をしている男に絡んでいる

「この女、お前の彼女だろ？」

「真美!!」

極道の男の部下に押さえられている真美

「どうして…!？」

「お前の彼女が、俺の部下が声をかけただけで蹴ってきやがってよ
お…」

「何が「声をかけただけ」よ!？」

怒鳴る真美

「完全にナンパじゃない!!」

「ああ? 関係ねえよ」

「…ッ!!」

「さあ、どう落とし前付けてくれるんだ？」

「とりあえず、真美を離して貰いましょうか…」

「ちよっと！アンタは、もう関係ないでしょ！？」

「いや…、ある」

「何を言って…」

「と——う——う！！」

ゴガン！！

「うげっ！！」

田中が真美を押さえていた極道部下を蹴り飛ばす

「何しやがる！？」

「今だ！！」

「解った！！」

真美を連れ、逃げる男

「デメエ…！！」

「悪いが、これ以上、彼達の関係性を悪化させるわけにはいかない
んでね…！！」

カキン

「キャア！！」

「咲紀ちゃん！！」

先刻、田中が蹴り飛ばした男が先の首筋にナイフを当てている

「この女がどうなっても良いのかぁ！？」

「いつの間に…！！」

「さあ、どうする！？」

「…ッ！！」

「離してください！！」

「黙れ！このアマ！！」

（どうする…！？この状況…！！）

ピンチ（後書き）

読んでいただきありがとうございました

奇跡

「おらおら！どうするんだ！？」

（とりあえず、咲紀ちゃんを助けないと……！！）
スウー…

「！！」

次第に田中の姿が薄れていく

「マズイ……！！」

「な、何だあ！？」

「何かのマジックか！？」

困惑する極道の男達

「やばい……！！」

ポン

姿を消す田中

「ど、何処に行った！？」

「捜せ……！！」

「今なら……！！」

咲紀に近づく田中

（白馬の王子様……！！）

「動かないで！今、俺の姿は彼達には見えてないから……！！」

「はい……！！」

「あ？何、言ってるやがる？」

「何でも……」

「おりゃ……！！」

極道の男を殴る田中

スカッ

「あれ？」

しかし拳は極道の男を透ける

「まさか……！！幽霊化してるから……！！」

「くっそー！逃げられたか！！」

「どうします！？アニキ！！」

「こうなったら…」

（電波！電波は…！！？）

「このアマだけでも、バラして売るぞ」

「そうですね！！」

「助けて！田中さん！！」

「電波は何処だぁぁぁぁぁ！！」

ブルルルルルル

「え！？」

「何の音だ！？」

田中の携帯が鳴り出す

（もしかしたら…！！）

ガチャ

携帯に出る田中

「もしもし！？」

「あ、田中か？聞いてくれよぉ」

電話の相手は佐藤

「今、真希さんから携帯の使い方を教わってマスターしたんだけど

…」

バチバチバチ…

「姿が…！！」

「お前も早くマスターしろって！！」

次第に田中の姿が濃くなっていく

「戻っていく！！」

「店長さんが凄い美人で、俺の好みだろ？アタックしようかと思っ

て…」

「ナイスだ！佐藤！！」

「え？」

ボタン！

携帯を閉じる田中

「あ、アニキ！後ろ！！」

「あ？」

「おらあ！！」

ゴッ！！

「うげえ！！」

極道の男を殴り飛ばす田中

「あ、アニキ！！」

「うぼえ…」

「咲紀ちゃん！早く！！」

咲紀の手を握る田中

「は、はい！！」

走り出す田中と咲紀

現在の携帯電話ショップ

「はあ…！はあ…！！」

「おい！田中！！」

「…佐藤か」

「何が有ったんだ？行きも切れ切れだし…」

「お前のおかげで助かったよ…」

「え？何が？」

「…何でもない」

「その子が咲紀ちゃん？」

「ん？ああ、そうだ」

田中の手を握っている咲紀

「可愛い子だが…俺の好みじゃないな」

「いや、聞いてないんだけど…」

「大丈夫でしたか！？」

真希が田中と咲紀に駆け寄る

「ええ、御陰様で」

「良かった…」

「彼女が携帯の所持者ですよ」

「このお方が!？」

「VIPルームへご案内—————!!」
再びVIPルームへ

奇跡（後書き）

読んでいただきありがとうございました

仲直り

現在のVIPルーム

「その様な事が…」

「大変でしたけど、どうにかなりました」

「良かったですね」

「はい、まあ…」

「で？そのカップルは？」

「今、探しに行く」

「私も行きますわ！！」

「うん、2人で捜そう」

「はい！！」

「じゃ、田中…、耳を貸せ」

「何だ？佐藤」

「お前、後で咲紀ちゃんを殺せ」

「はぁ！？」

「声がでかい！！」

「何の話ですか？」

「あ！気にしないで良いよ」

「どういう事だよ！？佐藤！！」

「忘れたのか？憲法を」

「…ッ！！」

「俺も言いたくはないんだよ…、だが憲法は憲法だ」

「だが…！！」

「お前が助けなければ咲紀ちゃんは死んでた、だが死という運命を背負った魂の結末は死だ」

ため息をつく佐藤

「憲法を破れば、彼女だけでなく、お前もどうなるか…」
「くそ…！！」

「最悪、冥獄行きだぞ？冥獄に放り込まれたらどうなるか…」
「…咲紀ちゃんを巻き込むわけにはいかない」
「そうだろ？殺せば幸せに幽霊界で暮らせる」
「…仕方ないのか」
「ああ、仕方ない」
「…どうしましたの？」
「行こう、咲紀ちゃん」
「はい！！」

現在の公園

「…何処かな？」
「居ないですね…」
「すいませーん！！」
「あ！！」

男と真美が走ってくる

「やっと見つけた…」
「どうしたんですか？」
「先刻、話し合いました…」
「仲直りしました！！」
「え！？」

（俺の努力は…？）

「田中さんも人が悪いですね！計画なら計画と言ってくれれば良いのに！！」

「それを言わないから計画なんですけど…」

「もうー！私を試すなんて酷いわね！！」

「ごめんなー！！」

イチャつく2人

（ああ…、うざい…）

「何は兎も角！ありがとうございます！！」

「まあ、仲良くね」

「はい!!」

走り去っていく2人

「仲良くなって、良かったですね!!」

「ああ、うざいけど」

「アハハハハ」

「…咲紀ちゃん」

「はい？」

「…俺、普通の人間に見える？」

「いえ、見えません」

（やっぱり…、知られてたか）

「ここまで格好良い男の人は初めてです!!それが普通だなんて…」

「あ、うん、ゴメン、聞いた俺がバカだったよ」

仲直り（後書き）

読んでいただきありがとうございました

交換条件

「咲紀ちゃん、真面目な話があるんだ」

「何ですか？」

「…死のう」

「え！？無理心中ですか！？」

「間違っではないけど…」

「無理心中…」

考え込む咲紀

「…どうしてですか？」

「俺は幽霊なんだ」

「幽霊？」

首をかしげる咲紀

「駅のホームで君を助けただろ？」

「ええ、助けていただきました」

「その時のこと、覚えてる？」

「確か…」

「浮いてたでしょ？俺」

「あ…」

「…幽霊憲法って言ってね、幽霊界の憲法があるんだよ」

「憲法？」

「そう、憲法」

「それを守るためにですか？」

「…うん」

「…解りました！！」

「え？」

「田中さんのためなら！例え火の中水の中！！」

「…ありがとう」

咲紀に近づく田中

「目を閉じてくれる？」

「はい」

目を閉じる咲紀

「…」

スッ…

田中が咲紀の目の前に手を持って行く

「行くよ？」

「はい…!!」

「…」

「…終わりましたか？」

「…もう少し」

「はい…」

「…」

「…田中さん？」

目を開ける咲紀

しかし、目の前に田中は居ない

「田中さん!？」

現在の幽霊界

「…良いのか？アレで」

ため息をつく佐藤

「やっぱり…、俺には咲紀ちゃんを殺せない」

「そうか…」

「田中殿！佐藤殿!!」

「…お出でになったな」

兵士の格好をした男が2人の背後に立っている

「幽霊憲法を犯した罪は重大! よって閻魔大王様の元にお出でになつていただきます!」

「佐藤も!？」

「はっ! 佐藤様は人間界の女性に手を出しましたので!」

「佐藤…」

「本望ッ!!」

「…あっそ」

「しかし! 田中殿の罪は重大! 佐藤殿よりも重いのです!!」

「…解ってる」

謁見の間

「閻魔様、失礼します」

「入れ」

ガチャン

部屋に入る2人

「お…、凄い覇気だぜ? 閻魔様」

気圧される佐藤

「そんなに構えるな」

「…はい」

「近くに来い」

歩いて行く2人

「で? どうして幽霊憲法を犯した?」

「…詰まらない情ですよ」

「…詳しく聞かせろ」

事の顛末を話す田中

「…そうか」

「閻魔様! 田中は確かに幽霊憲法を犯しました!!」

叫ぶ佐藤

「しかし! あo場で見捨てていれば! 田中は幽霊としての尊厳を失いました!!」

「…そうだろうな」

「田中の行動は特例としてください!!」

「…お前の行動は?」

「愛故の行動です! 俺も自分の信念に従ったまでです!!」

「…面白い」

にやりと笑う閻魔

「じゃ、交換条件と行こう」

「交換条件？」

「冥獄の入り口は知ってるな？」

「冥獄…!!」

「そこに1人のイレギュラーが入り込んだ」

「イレギュラー…、ですか」

「奴なら冥獄からも脱せるだろうが…、少し時間が掛かりすぎる」

立ち上がる閻魔

「よって！だ！！」

「何でしょう…？」

「この鍵を使って、冥獄の門を開けてこい」

「それが交換条件ですか？」

「そうだ」

「…解りました」

「冥獄の門は危険だ…、解ってるな？」

「はい…」

「よし、行け」

「行ってきます」

「俺はその間に、お前達に関わった人間の記憶を消しておこう」

「ありがとうございます」

交換条件（後書き）

読んでいただきありがとうございました

冥獄の門

冥獄の門

「ハジヤ様から話は伺っている」

門番が退く

「大変危険な場所だ」

「解ってるっ、て」

「…ならば良い」

ガシヤアン…

「扉を開けるだけで良いんだろ？」

「そうだ…、しかし」

ガチャン

「よし！完了！！」

問答無用で扉を開ける佐藤

「おい！！」

「ん？どうした」

「その扉の中には…」

ガゴオオオオン…

「キシヤアアアアア！！」

凄まじく獣のような叫び声を轟かせる黒い物が出てくる

「何だあ…！？コレ！！」

「佐藤！！」

ドオン！！

佐藤を突き飛ばす田中

「うお！？」

バグウン！！

佐藤の立っていた場所が無と化す

「コイツ…！？」

「闇だ」

「闇い!?!」

「お主達が相手に出来る物ではない」

「だったら!何で…」

「本来、獅師様…、いや闇魔様からは「説明を聞いて逃げ出すか逃げ出さないかを試せ」と言われていたのだ」

「だけど、俺対置は説明すら聞かずに開けてしまったと…」

「そう言う事だ」

「佐藤…」

「やっちゃまったなあ…」

「キシャアアアア!!!」

「とりあえず…、どうする?」

「約束は約束だ」

構える田中

「…幽霊程度が勝てる相手ではないぞ」

「解ってます」

「では…」

「だけど、俺はやる」

「…良いのか?」

「約束ですから」

「「約束」?」

「アイツ、人間界の女の子と約束したんですよ」

「何と?」

「「また会おう」と」

「…そうか」

「キシャアアアア!!!」

「むう!!!」

ガアアアン!!

「キシャア…」

「痛っ…!!!!」

田中の手から血がしたたり落ちる

「やはり無理だな…、格が違いすぎる」
構える門番

「後は任せろ」

「しかし…!!」

「行くぞ、田中」

「佐藤!!」

「無茶するなよ」

「…ッ!!」

「お前が、あの化け物に喰われちゃ元も子もない…、違うか？」

「…解った」

「後は任せましたよ! 門番!!」

「ああ」

謁見の間

「…で、開けたのか」

「はい」

「約束は約束だな」

ポンッ

紙に判を押す閻魔

「特例、決定」

「随分、簡単ですね…」

「別に大したルールでもねえし」

（幽霊界の最高権力者が何を言ってるんだ…）

「さて、ご苦労だったな」

「門は開けました」

「ああ、俺も記憶を消し終わった」

「…そうですか」

「じゃ、帰れ」

「幽霊界にですか？」

「それ以外に何処がある？」

「…解りました」

帰って行く2人

「元氣出せて！田中！！」

「ああ…」

ボタン：

静かに閉まる扉

「獅師様」

「何だ？^{ブリュウ}仏龍」

「奴が冥獄から出ました」

「…そうか」

「計算通りで？」

「まあな」

「…結局、奴を救うのも「思い」ですか」

「…数奇な運命だ」

「…そうですな」

冥獄の門（後書き）

読んでいただきありがとうございました

別れて出会って

数十年後

現在の幽霊バー

「田中！田中！！」

「どうした？佐藤」

「コレ！見てみる！！」

新聞紙を見せてくる佐藤

「何々…、「令嬢、借金により自殺」…」

「もしかして…」

「…そうかもな」

「何だ？嬉しくないのか？」

「人と死んで嬉しいもクソもあるか」

「…悪い」

「…構わねえって」

ため息をつく田中

「…嫁さんが待ってるんだろ？」

「そうなんだよー！愛しのみっちゃんが！！」

（このテンション…、何処かで覚えが…）

「娘も可愛くてなあ！！」

「…もう良い」

「そんで、息子もまた…」

「聞けよ」

「失礼」

門番が2人の元を訪れる

「あ、門番」

「田中殿、面会を希望されています」

「誰？」

「…匿名希望で」

「…解った」

「…行くのか、田中」

「行かなきゃな…」

「…そうだな」

歩いて行く田中

「記憶、消したんじゃ？」

「幾ら凄い技や術でも「人の思い」には負けるのだ」

「…そうか」

面会室

「…どうも」

「…こんにちわ」

「大変だったね」

「…はい、情けない話です」

「…ゴメンね、見捨てて」

「見捨ててなんか！見捨ててなんか…」

「…ゴメンね」

「…いえ」

「俺はこっちの世界で暮らしてるよ」

「私は…」

「…幽霊界に？」

「…はい」

「それで、面会ってのは…」

「…閻魔様が「不幸すぎる人生をやり直す権利をやる」って、言ってくれたんです」

「…つまり、生き返れると」

「別の人間ですけど」

「…どうするの？」

「…生き返りません」

「…そう」

「この世界で暮らします」

「…その事での面会？」

「私と！私と一緒に暮らしていただけませんか！？」

「…君が良いなら」

「勿論です！！」

「…ありがとう」

少し未来の幽霊バ―

「…おめでとう」

「どうも」

「で？どうなの？」

「毎日、メルヘン物語を聞かされてるよ」

「アハハハハ！お疲れ様！！」

「味噌汁は美味いけど」

「料理、出来るんだな」

「ああ、出来るな」

「順調で何より」

「お前は？」

「…それがな、「いつまで新婚気分なの？」って怒られた」

「…お疲れ様」

「だが！しかあし！！」

立ち上がる佐藤

「新婚気分とは！持続すればするほど幸せを手にする事が出来るのだ！！」

「…頑張れ」

「おう！頑張るぜ！！」

「パパ！！」

「ああ、来たのか」

小さな女の子が田中に向かって走ってくる

「何だ？子供が居たのか」

「ああ、居るけど」

「…幸せそうだな」

「ああ、幸せだ」

「じゃ、俺は帰る」

「帰るのか？」

「腹あ、減ったし」

「ここで喰えば良いだろう」

「…ま、色々あるんだよ」

歩き去る佐藤

「パパ！帰ろう！！」

「ああ、そうだね」

「お母さんが待ってるよ！！」

「…帰ろうか」

帰りの道中

「お父さんはねー！どうしてお母さんと結婚したの？」

「色々あったんだよ」

「そうなの？」

「そうなの」

「幸せー？」

「俺が幸せで咲紀が幸せならね」

「そうなの？」

「そうなの」

「そうなんだー」

「そうなんだよ」

別れて出会って（後書き）

今まで読んでいただきありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835p/>

病んだ彼女と不運な幽霊

2011年1月29日08時12分発行